

ホトトギス

十二月号

ホトトギス

昭和二十七年三月二十八日運轉開始特別換水証第百六十七号
平成二十七年十二月一日発行（第百十八卷第十二号）



俳句随想〔四百二〕

汀子

暫くお会いすることがなかった脇牧子さんの訃報を東京で受け取った。次の日がお通夜で、ご葬儀は九月二十一日という。東京へお報せ下さった本郷桂子さんに弔句をフアックスでお届けして、私はお通夜に間に合わないことをお言づけした。ご葬儀の日は私はロイヤルホテルの八十周年のお祝いの会に出席して、募集句の句評と「歳月と俳句」という題で講演をさせて頂くことになっていった。

「秋灯に永遠の笑顔となられけり 汀子」

牧子さんの俳歴は長い。色々な句会で一緒にすることも多かった。彼女はいつも笑顔を絶やしたことがなかった。明るくて声も美しかった。ロイヤルホテルのエコールドロイヤル俳句会にも来られていたが、体調の関係で来られなくなってしまうわれ久しい。

美しい亡骸にお別れして来たと桂子さんからお知らせ頂いた。牧子さんは周りの方々に笑顔を送ってこられ、彼女の笑顔の中で誰もが幸せになったのである。北海道の中田佳都美さんも天寿を全うされた。「爽やかに天寿全うされしこと 汀子」心よりご冥福をお祈りしている。私はこの後もスケジュールが詰まっている。何とか元氣に遣り果せたらいいなあと思っている。ホトトギス誌友の皆様のご健康をお祈りしてホトトギスや日本伝統俳句協会の皆様のご健吟と発展を願っている。日本伝統俳句協会の設立の時の文部大臣塩川正十郎様の訃報も知った。大変お世話になった方である。ご冥福をお祈りしつつ心の中で感謝の気持ちの祈りを捧げた。

句日記 汀子

平成二十六年十二月一日 ロイヤル俳壇

枯萩に華やぎを置き初めし頃
さつきまで雨止んでぬし冬の朝
一年をふり返りつつ冬の朝
はや次の年動き出す師走かな
十二月二日 有恒俳句会

風のをさまめることを承知して
日の当りみても寒さのあるベンチ
入口が出口よ風の寒さかな
暖房の部屋が逃げ場でありしかな
悴んで庭より逃れ来し仲間
寒さうな顔の集まる控へ室
豊作の柿鈴成りのままの庭
十二月二日 無名会

冬ざれの名苑として掃かれあり
冬鳥の声名苑をつかさどる
一と巡りして名苑の寒さかな
冬紅葉日を失ひし彩りに
忽ちに寒き一日となりけり
街騒をへだつ名苑散紅葉
十二月三日忘年会

師走とはまだ実感のなきままに
祈りあり師走の心抱きつつ
今日済めば師走一氣に動き出す
十二月四日 悼 田村元様
思ひ出をなつみ年惜みつつ
十二月六日 芦屋ホトギス会
粕汁や禁酒の枷を解くまじく
初雪の便りと共に現はれし

十二月七日 下朝句会

水音の絶えてをりたる初水
霜月の二日三日はまたたく間
落葉踏む音の家居でありしか
十二月八日 祝「円虹」二十周年
震災に耐へ初刷となりしこと
十二月九日 大阪倶楽部

短日に処して行かねばならぬ用
クリスマスリースの部屋と気づきけり
すぐそこに来し初雪の便りかな
鴨陣を解き復元の句碑の辺に
ともかく師走の心持ち寄りて
朝月の沈み短日はじまりし
十二月九日 綿業倶楽部

見透せることなつかしき冬木立
根深汁ぬくめ直して二日目に
この寒さ半端でないといと鑑ひ来し
十二月十一日 清交社

クリスマスデコレーションの待つ句会
枯草の踏みしだかれぬし命
おでん煮てありし安堵の遠出かな
見た目には枯草となり果せたる
おでん煮てをれば出掛けるかと思はれ
枯草の抜け道を来し人ばかり
赤と白纏ひてクリスマス句会
十二月十二日 工業倶楽部

快舞を冬木が語りをりにけり
鶴舞ふや鶴の心に従へり
冬帝に委ねし旅となりしこと
十二月十三日 九州ホトギス俳句大会前日句会
柳川の炬燵舟てふはかりごと
柳川の堀を巡りてぬし師走

十二月十四日 九州ホトギス同人会

この庭の記憶戻してゆける冬
この庭の四季を訪ねん冬の旅
十二月十四日 九州ホトギス俳句大会
短日の旅とは又もせかされて
決まりたる帰りの時間旅師走
十二月十七日 「朝日新春詠」

病む友へ祈りの深し去年今年
記憶せんむすめふさほせうたかるた
雪予報ふたたびみたび空仰ぐ
十二月十七日 夏潮句会

大枯木樹型淋しくなりにけり
散るものは散りて燃え立つ冬紅葉
この庭の消息として初氷
吹かれ来し風花となり消えしもの
雪国の雪の消息携へて
寒さうな顔のほどけて部屋に入る
風荒れて日の射して冬紅葉かな
十二月十八日 アネモネ句会

わが影の消えて生れて冬木立
息白きこと胸のうち明かさざる
旅心置く雪の景俯瞰して
今日殊に美しき雪富士のもの
新しき企画あれこれ息白く
十二月十九日 時雨句会

二つして三日なりしくしやみかな
一年のこの日待たるクリスマス
花東を抱き余りぬクリスマス
くしやみしてより人の目を集めけり
一つでは済まぬくしやみとなりけり
寒きこと口には出さず表情に
あと二日冬至待たる心かな

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年十一月一日「凹虹」新年号色紙揮毫

二十年てふ決意年改る

十二月一日ひげ増二十年祝句

神迎三十年といふ力

十二月三日カトリック新聞選考時

障子貼るここにも切支丹哀史

十二月四日蕉心会

カレンダー抱へ営業マン師走

雨男返上するの止めて冬

刈り込まれ過ぎて山茶花俯けり

渦巻いて大川冬へ加速せり

閉ざされし屋上庭園日短

大川を吸ひ上げるかに時雨雲

今日でもう忘年会は三回目

十二月五日六甲会

この枯木目印として山に入る

スチームに動き出すホ社編集部

風音を肴としたる枯木宿

この一樹枯木となりてより自由

スチームに眠りチヨークが飛んで来る

スチームに仕上がる弁当のおかず

十二月七日野分会所属例会

何言はれやうが日本人は鯨

食後酒は炉端でどうぞ山の宿

鯨捕るエイハブ船長めく男

十二月七日虚子記念文学館投句

記念樹を守る冬紅葉冬黄葉

十二月八日朝日カルチャー若草句会

葱刻む厨より朝明けて来し

数へ日や今年も旅で締め括る

御歳暮に消息を確かめもして

数へ日や数へ切れざる仕事量

歳暮より始まる縁ありにけり

数へ日や使ひ切つたる事務机

数へ日ややつと踏ん切りつきしこと

十二月九日土筆会忘年会

東京に馴染み馴染まぬ納豆汁

白鷺の孤高を余所に鴨の陣

母一人子ひとり今日も納豆汁

十二月十日目黒学園句会

古暦一枚といふ重さかな

おでん屋の決まつた席の君偲ぶ

山眠る標高少し低くして

眠る山眠らぬ星に見下され

おでんの具あなたの好み当てませう

おでんの具関西風出汁関東風

十二月十一日「俳句さく咲く」収録

おでん酒風に歪みし汽笛かな

十二月十三日九州ホトトギス同人会、大会

朝時雨より目覚めゆく川の町

虚子杞陽ここに足跡冬ぬくし

寒灯下幸若舞は回るまはる

雪の帰路越えぬばならぬ関ヶ原

小鼓の音色冷たく消えゆけり

十二月十六日北國文芸選考時

西の旅路冷たく伸びゆけり

十二月十六日北國文芸新年挨拶

事務始先づ山積み之选句より

十二月十八日登高会忘年会

君のその一言だけは冬ざるる

大琵琶を狭めし数の浮寝鳥

白味噌に京人参といふ雅

冬ざるる山手線の発車ベル

江戸よりの凜知り尽し浮寝鳥

十二月二十日伝統俳句協会神奈川・東京部会

赤れんぐわ潤すほどの朝時雨

朝時雨本降りとなるまでの黙

黄落に色の存問赤煉瓦

十二月二十一日野分会東京例会

我納句座妻武道館ライブ

炉話に加はる座敷童かな

あなたには炬明りほどの恋心

江戸明治大正昭和炬火を守り

鯨にも人にも事情ありにけり

十二月二十一日田鶴新年号出句

若水を汲みこれからのことをふと

箸紙に同じ名前を記す幸

乗初やそろそろ思ひ切ること

諦めることも勇気や去年今年

泣初は嬉し涙でありたしと

十二月二十日宇廻丸贈答句

縁とは神田宇廻丸てふ恵方

十二月二十三日若水句会

波瀾万丈の三年日記買ふ

結局は二人の生活年守る

三頁目の破られし日記果つ

蕎麦搔に老舗の味のありにけり

結局は振られ交換日記果つ

蕎麦搔や信濃の風を聞きながら

十二月二十六日カトリック新聞選考時

小春日やミサが終れば吟行に

雑詠 廣太郎 選

一張羅 大夕立と競走す 松本 唐澤春城
 当にせる夕立に又裏切られ 同
 この暑さ応へぬ人に安倍総理 同
 走馬灯廻るなんども懐しく 神戸 後藤立夫
 ともかくも半分に折り苧殻てふ 同
 西瓜切るとはああ切つてかう切つて 同
 簾の灯ともり祇園となりにけり 福山 竹下陶子
 敵前の歩哨に立ちて明易し 同
 対陣の壕の仮寝や明易し 同
 渾身の一事涼しき汗なりし 箕面 井上浩一郎
 突然に世のま只中昼寝覚 同
 炎天のほか空港に何もなし 同
 切れさうな角の脆さや新豆腐 香川 湯川 雅
 銀漢の真下に我の芯となる 同
 沈みゆく海月に波の拡大鏡 同
 日盛の道真つ直に真つ白に 袋井 湖東紀子
 好奇心 詰め七月の旅靴 同
 銀の匙 銀の器の氷菓かな 同

七月の雨と太陽交錯す 龍ヶ崎 今橋真理子
 突然のアイスクリーム日和かな 同
 向日葵の花より雨の上がりたる 同
 前泊の宿の分厚き初鯉 東京 大久保白村
 新緑に牧野博士の精籠る 同
 予報よりいごつそうなる夏の雨 同
 総会も学びの旅や明易き 長岡 安原 葉
 夕焼をみな見惚れ立つ星見台 同
 昼寝覚めきらぬ顔出てきし玄関 同
 わさわさと揺るるや風の麻畑 芦屋 黒川悦子
 口中を暴れて甘きソーダ水 同
 恐竜の好きなき子にくる夏休 同
 松風の縁より上がる夏座敷 神戸 山田佳乃
 これよりの道に登山の靴固め 同
 紫の面影ほのと濃あぢさゐ 同
 露けしや不戦の城の四百年 同
 城涼し平和の白を輝かせ 同
 北側を守る城郭の木下闇 同
 万緑に秩序与へて庭となす 同
 武者隠しより誰も出て来ぬ暑さ 同
 来し方を語るゝより夜の秋 同
 変化とはまだまだ遠き四葩かな 東京 橋本くに彦
 蓮咲くや音したやうなせぬやうな 同
 秋蟬となりゆく声のビブラート 同

雑詠句評（十一月号より）

肖子・美奇・眞理子
保佳・とほ歩・中正
静龍・憲明・むつみ
葉・廣太郎

足さするだけの見舞や若葉冷 岡山伴 明子

も経験しなければならぬ一事である。お孫さんをお授かりになった作者であるが、恐らく御一緒に居られるのだろう。御自身の経験も思い出されて、しつかり「短夜」を使い切る新しい生命を感じておられるのである。（廣太郎）

何と優しい、情のある見舞いであろうか。

渺々しくない病状の方を見舞われたのであろう。心優しい話をする状態ではない。

早く早くよくなって頂きたい大切な方、せめて冷たい足を摩つて、黙つて見舞い心を伝えられたのであろう。

季題「若葉冷」が作者の心をよく表していると感心。（美奇）

かなり重篤な方のお見舞ではないだろうか。長々と会話をする事もままならない様子が見て取れる。せめて足をさする事によって少しでも苦しみを和らげようとする作者の切なる気持が伝わってくる。季題の「若葉冷」の微妙に明るい雰囲気との対比が、一層切ない気持を表している。（廣太郎）へ以下略

短夜のく網震はせて赤子泣く

龍ヶ崎

今眞理子

赤ん坊の本気の泣き声は大きいと同時にワントーン高く、闇震わせてという表現がびたりとくる。へみどサ兒の瞳の中の春灯へかたはらに春眠の子のある目覚めへは、作者の長女誕生、次女誕生の時の作。その時に此べると暑さも手伝つてより大変だ。久しぶりに子育て時代を思い出している孫句だが、変わらず詩情がありながら客観的である。（肖子）

生れて間もない赤ちゃんの夜泣は、子育てにとつてはどうして

天地有情

子選

伽石は草に隠れて句碑涼し
 よべ星を見惚れし野原露涼し
 草摘んで大地の鼓動聞いてをり
 草摘んで地軸ずらしてをりにけり
 何となくなくなつてゐるバナナかな
 日盛を濃き我が影に引かれゆく
 腰振つてゐる子子といふ字かな
 代田にも映る合掌造の灯
 万緑の花背峠を幾曲り
 頂上を征して振るや夏帽子
 雲海にまあるい虹を見たること
 久闇の横顔すこし日に焼けて
 虫干の菊の御紋のつきしもの
 虫干や寺宝といへど鎌刀
 人麿の知れぬ最後や石路の花
 この子らの宇宙旅行や七五三
 青春を賭けたる黴の一書かな
 発したる一語たちまぢ黴びにけり

長岡 安原 葉
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 同 今橋眞理子
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 吹田 大橋 暁
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 神戸 三村純也
 同
 福山 竹下陶子
 同
 熊本 岩岡中正
 同

旅ごころいつしか端居心かな
 搦手はまた蜘蛛の囿でありにけり
 夕焼の散歩が好きな夫なりき
 亡き夫の靴音と歩す夏の夕
 九時間の旅路の果ての星月夜
 雨静か 姫 逃 池 の 未 草
 佳きものに一葉の秋といふ言葉
 岐阜提灯ともせば草の花灯る
 藤椅子に富士と一緒に暮れてゆく
 月見草富士は眠つてしまひけり
 水母なら漂ふだけでよいけれど
 甘酒の甘えすぎない甘さかな
 六甲へ今日が終つてゆく夕焼
 若かりしあの日の夕焼小焼かな
 我が田いま闇に浮かびし虫送
 虫送虫の一族連れだつや
 大綿を明るき空へ見失ふ
 雲ひとつ鳥のかたち冬ぬくし

東京 河野美奇
 同
 神戸 長山あや
 同
 東京 山田閨子
 同
 神戸 後藤立夫
 同
 相模原 木村享史
 同
 神戸 和田華凜
 同
 大阪 佐土井智津子
 同
 石川 辻口八重子
 同
 東京 今井肖子
 同

遠い旅

稲畑汀子

今年も石見ホトトギス大会が開催される三瓶山への旅が近づいていた。

同じ中国地方と言っても日本海側の島根県、鳥取県などの方々は中国山脈があるため瀬戸内海側での大会には簡単には参加出来ないということもあって、日本海側の石見地方でホトトギス大会が開催されるようになって久しい。初めは、島根県の津和野と三瓶山へ交代で何っていたが、車でお伺いするのに津和野は余りに遠いということもあって、今では三瓶山ばかりになって三十三回を重ねて来た。津和野も歴史が古く、見るところも多く、誠に句材の豊富な素晴らしい地であるが、三瓶山と決まると何となく落ちついて遠くからも参加する方も増えて来たように思う。

今年の石見ホトトギス大会は七月十八、十九日の土、日であり、私と行動を共にする希望者も増え、少し余裕のある二十五人乗りのバスを準備することになった。東京から参加するのは三人、新潟からの安原葉さんを入れて四人は、前日、芦屋の竹園ホテルへ泊まり、わが家を午前七時に出発する十六名の準備が出来た。

南の海上をうろろしていた台風十一号が、北上に向きを変え、刻々と近畿地方へ近づいているとテレビのニュースで報道され始めたが、金曜日には通り抜けてしまおうと安心していた。台風は自転車ほどの速度でうろろしている。金曜日の朝日俳壇の仕事は、日帰りで空を行き来する積もりであった。

「大丈夫よ。台風一過、快晴になるのじゃないかしら？」

だんだん近づいて来るに従って、台風はいよいよ我々の旅程に重なるような雰囲気になってきた。

金曜日の日帰りの上京は空の便の欠航で無理となった。選句は三瓶の旅から帰ってからでも間に合うことになってほっとした。台風は関西圏を縦断して、旅立の朝は雲は重いが何とか晴れ上がったくれた。

早くから、続々集まって来た仲間たち、さあいよいよ三瓶山へ向かつての旅立ちである。四十年バスを運転して来たというベテランの運転手に命を預けた。

バスは新神戸の辺りから北へ抜けるトンネルへと向かったが、掲示板に通行止めの表示が出ていた。六甲トンネルの通行止めから向かった神戸のトンネルも駄目であった。

「ありゃ」

「へえ、これも駄目なの」

バスは神戸の市内を渋滞に揉まれながら西へ道をとった。

「何処を抜けて行くの？」

「さあ？」

「ともかく何処も台風の影響で北へ抜ける道がありません。全部
通行止めです」

「あれまあ」

ともかく西へ西へと取る道は渋滞である。

「神戸がこんなに広いとは思っていなかったわ」

いつしか神戸の西北から早朝来られた吉田先生の自宅の近くに
来ていた。

「先生、そこから道案内をお願いします」

「その一筋向こうがわが家です」

「へえー、良い場所に住んで居られるのですね」

「いやあ、不便ですよ。では抜け道を教えてください」

何とか姫路を抜けて播丹道へ乗った。四時間も神戸を抜けられ
なかったことになる。

「神戸って広いですね」

「あはははは」

ようやく中国自動車道に入る事が出来た。

「休憩を取って、お昼を頂きましょうよ」

塚本さんの提案に一同従うことになった。

田中静龍さんとも連絡が出来た。

とても旬会には間に合わない。廣太郎が前日から行っている
で、全てよろしくという事だったのでありほっとした。さすがに
遠い旅であった。わが家を出て九時間が経っていた。

夕食の後、夜遊びと称して暗闇で星を見る会があった。一片の
雲もなくなった夜空には満天の星座が輝いていた。

原っぱの大きな松の枝に蛇の衣が十本掛かっていると、ひそひ
そと告げる声が聞こえていた。

